

カトリック山手教会月報

やまて



編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>

第609号 2020年11月8日

鈴木真師主日ミサ説教

9月13日・年間第24主日：マタイ18・21-35



「七の七十倍までも赦しなさい」…。

「七」は聖書では完全さを表す数ですから、ペトロさんも「『七』を出せば大丈夫だろう」と思ったのでしょうが、イエスの答えは「その七十倍」でした。『聖書と典礼』の注書きもあるように、これは要するに「限りなく」ということです。なぜならば、とイエスは言われます。わたしたちは、神さまにあり得ないほどの負債をチャラにしてもらっているのだから、と。たとえに「タラント」が出てきますが、これはギリシャの貨幣単位で、とんでもない規模のものです。「タレント」の語源にもなったと言われています。福音書によく「デナリオン」という銀貨が登場しますが、こっちはローマの貨幣単位で、労働者の一日分の給料だそうです。「タラント」はその6000倍、つまり6000日分の給料、ということになります。ちょっと簡単には今の円に換算することはできないと思いますが、簡単に考えられるように1デナリオン=10000円とするなら、ここで出てくる「一万タラント」はなんと6千億円、もはや国家予算の領域ですよ。それだけのものを赦してもらった人が、百デナリオン、つまり百万円の貸しを赦すことができなかつた。無論、百万円だって少なくはないわけですが、自分がどれほどの恵みを頂い

ているか、わたしたちは往々にして気づいていないのかもしれませんが。まあ、わかっちゃいるけど…、という感じですね。

よく考えることですが、わたしたち人間は厳密に言って、本当に人を「赦す」のは無理ではないか…、とも思ったりします。いくらいったん「赦した」と思っても、それから何年もたつてから、その人にされたことを再び思い出すと、新たな怒りがふつふつとわいてきたりします。今日のたとえでもそうですが、人間は人にしたことは、いとも簡単に忘れませんが、「された」ことは決して忘れない。たとえ行為としての復讐や仕返しなどはしなくても、「気持ち」を変えることはそう簡単ではありません。そう考えると、もし、わたしたちが人を「赦す」ことができるとしたなら、それを可能にできるのは神さまだけです。そうであるならば、わたしたちに必要なのは「赦させてください」と神さまにお願いすることなのかもしれません。でも、そんな気持ちにさえなれない、そんな祈りさえもできないときもありますよね。わたしも以前、どうしても赦せない人がいました。赦す気もありませんでした。神さまには「わたしはあの人を赦せません。赦す気もありません。すみません。アーメン」などと祈ってました。その人が亡くなったときも、「お前、死んだからって安心するなよ。オレはお前を赦してねーからな」などと思ってました。でも、それから何十年も経ってから、その人のことを思い出したとき、「かわいそうな人だったのだな」という気持ちになって、そんな気持

ちになった自分に驚きました。そして気がつきました。わたしの中で「赦し」を実現させてくださったのは、神さまだったことを。

なかなか人を赦すことのできないわたしたちは、まずは神さまに無条件に「赦されて」いることに気づき、目を向けることが必要なのでしょう。せめて「赦させてください」と祈ることができますよう、求めていきたいと思います。



9月27日・年間第26主日：マタイ21・28-32

今日は、もともと「子どもとともにささげるミサ」の予定でしたので、説教は子ども向けにさせていただきます。

小学生の皆さん、元気ですか？いつもなら運動会とかの季節でしょうけど、今年は色々難しいでしょうね。学校の先生方も、感染症対策でご苦労なさってると思います。「教会学校だより」でも書きましたが、教会では初聖体クラスだけがスタートしました。11月21日（土）の午後に、ミサの中で初聖体を受ける友達がたくさん、そして洗礼を受ける人もいます。どうぞ、良い準備ができるよう、お祈りしてくださいね。

さて、今日の福音では、イエスさまがたとえを話されています。「ある人に2人の息子がいて、息子たちに『仕事を手伝いなさい』と言うと、お兄さんは『やだ!』と言ったけど、あとで考え直して手伝った。弟の方は『はい!』と言ったのに、サボって行かなかった。どっちがいいの?』いや、どっちもダメだろ、

と思っちゃいますね。だって言ってることとやることが違うじゃん。でも、イエスさまは、お兄さんの方がお父さんを喜ばせたよ、と言うんですね。何ででしょう？

聖書では、「人間はみんな、神さまの前では罪人だよ」と言います。日本語で「罪人」と言うと、悪いことをした人、という意味が強いけど、聖書で言う「罪」とは、神さまから心が離れちゃってることを意味します。いつも神さまのことを考えてる人なんていませんよね。じゃあ、神さまのことを考えてないとき、何を考えているのか…、「あれ欲しいな」とか「これ食べたいな」とか…、要するに自分のことを考えているんです。人間は自然といつも自分のことを考えます。だから、神さまのことを忘れがちになっちゃう。そして、だからこそ、それに気づいて神さまの方に心に向ける必要があるよ、ということです。「人間は、みんな神さまの前では罪人」とは、そういう意味です。逆に、神さまの方を向いているフリして、本当は心の中で全く違うことを考えたりしたら、神さまは悲しまれる。当たり前ですよ。

イエスさまは、このたとえを「祭司長や長老」、つまり当時の偉い人に話しています。当時の偉い人たちは「自分たちは決まりをきちんと守っている正しい人間だ」と言って、決まりを守らない、あるいは守れない人たちを「罪人」と呼んで差別していました。そんな人たちに、イエスさまは言うんです。「いやいや、みんな『罪人』なんです。だから、それに気づくこと、そして神さまに心に向けることを、神さまは喜ばれるんだよ」。

聖書の中でイエスさまは、こんなことも言っています。「いいことは、黙ってやりなさい。なぜならば、神さまがちゃんと見てくださっているから」。人のお手伝いをするとき「ほく手伝うよ！手伝うよ！手伝うよ」ってしつこく言われたら、ウザいよね。それは、本当は人のために何かをしているんじゃないから、自分がほめられたいから、いい人に見られたいから…、つまり「自分のため」になっちゃってますよね。だから、本当に人のために何かをやるなら、黙ってやりなさい、と言われるんです。

わたしたちがいつも神さまから心が離れがちに

なっちゃんことに気づいて、そのたびに神さまへと
心に向け直すことができるように、一緒に祈りま
しょう。

